

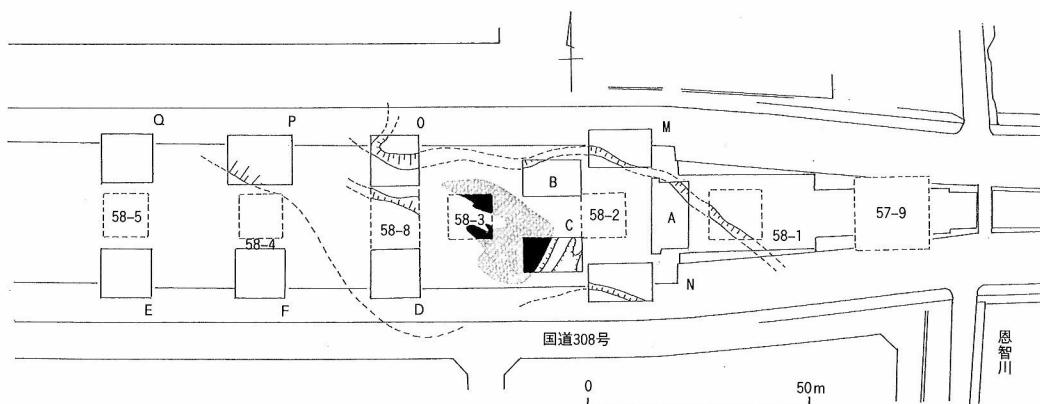
3 鬼虎川遺跡の初期貝塚

鬼虎川遺跡は、生駒山の西麓部に位置し、西に広がる河内平野部へ移行する付近にあたり、現在の標高はおよそ3～4mである。旧地表はTP約2～3mで、地表下3～4mほど下に弥生時代遺物包含層及び遺構が良好に遺存している。

遺跡は、現在の国道308号が国道170号と交差する東大阪市弥生町を中心とし、東北部分は一部西石切町、南は新町へ広がり、東側は弥生時代後半～中世にかけた西ノ辻遺跡、西側は山麓の水を集める恩智川をほぼ境に、平安～室町時代を中心とする水走遺跡に接し、東西500m、南北800mの範囲に広がる河内平野でも屈指の弥生時代中期を中心とする低湿地集落で、集落縁辺に貝塚が伴い、また豊富な木製品と銅鐸等の鋳型が出土した遺跡としてよく知られている所である。

恩智川のすぐ西側、遺跡の西端にあたる国道308号の分離帯内で、昭和58年～59年にかけて鉄道東大阪線及び阪神高速道路水走ランプ口の橋脚建設に伴って実施した鬼虎川遺跡第21次・27次調査により、凹地底から前期後半の遺物包含層の下から、時期の遡る突帯文系土器を伴った弥生時代初期の貝塚が発見され、多数の土器と共に骨角牙製品、木製品、貝製品、石器などの遺物が出土し、両時代の移行期の様子を考える上で貴重な発見となった。

貝塚の発見された凹地は、現地表下約5.2mの所に存在し、幅は25mから広い部分で40mにも達し、緩やかに底部へ傾斜して深さは1.2mを測る。凹地は東方の鬼虎川遺跡の中心部へと続き、西方は近くの河内潟へ通じていたと見られる。凹地は中期末までに埋没していくが、底近くに堆積した前期後半の土器・木製品などを含む単純な遺物包含層の遺物出土状況から、潟の干満の影響を受けて凹地内に汽水がかなり侵入し、漁撈のエリやモンドリ状の仕掛けが施されていたと見られる。貝塚はこの層の直下、凹地の中央最深部で検出した。



▲貝塚の位置図



▲貝塚の検出状況(第27次調査Cピット)

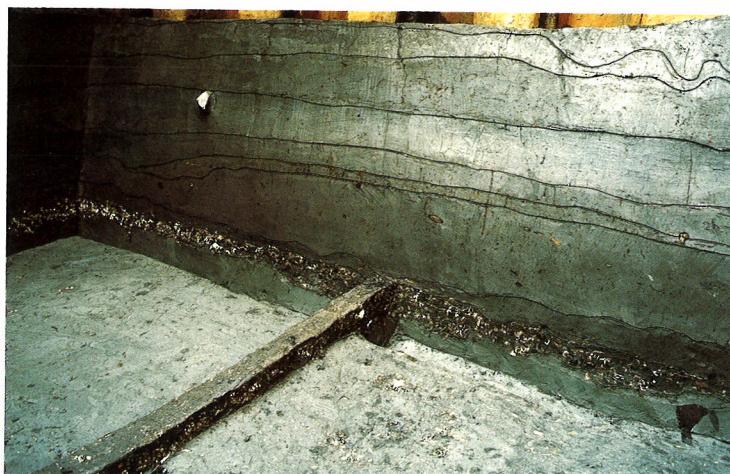
層別		層 土 色	特 徴	出 土 遺 物
21次調査				
第24層		黒褐色泥炭粘土	淡水層	弥生前期末～中期初めの土器少量
第25層		黒色植物片混シルト質粘土	弱い汽水	弥生前期中ごろ～後半土器（壺・甕・鉢・蓋）石器（石鎌・石鑿・石庖丁）木製農耕具（鋤・鋤）・その他木製品（木葉文を刻む団扇形木製品・把手状木製品・漁具・弓ほか）骨角製品（籠製品・歯牙製垂飾・浮袋口）輪形樹皮製品・粉痕土器片
第26層		オリーブ黒色シルト質粘土 (貝塚層)	弱い汽水	縄文晩期末突堤文系土器（深鉢・精製浅鉢・粗製浅鉢・壺）弥生前期前半～中頃土器（壺・甕・鉢・蓋） 石器（石錐・石鎌）・不明石製品 土製品（土錐・環状土製品） 木製品（柄状木製品・劍形木製品・蛤刃石斧の斧頭・弓） 骨角牙製品（籠形垂飾り・牙製腕飾・黒漆塗短劍形骨製品） 貝製品（マツカサ貝製垂飾・サルボウ貝製垂飾） 自然遺物（セタシジミなど貝類・獸骨・魚骨類・カニ爪）など
第27層	第29層		海水～汽水	地山層、まれに縄文後期の土器を含む

貝塚は、凹地が胃袋状にやや広がった部分のほぼ中央部に投棄形成されていた。その規模は東西約27m、南北約18mで、西半区域は流水による侵蝕で帯状となっていた。貝塚層は、各種の貝を含む黒色のシルト質粘土層で、約15cm～10cmの厚みで西へ広がり、面積は約320m²を測る。

貝塚を構成する貝の種類は、淡水産7種、汽水産2種、海産15種の合計24種で、第27次調査の知見では、貝総重量約148kg中の個体別割合は、95%が淡水産のセタシジミ貝(75.2%)とクロダカワニナ(20.14%)が占め、この他にササノハガイ・ヒメタニシ・ドブガイ・カラスガイ・セタイシガイが少量混じり、河内潟縁辺の低湿地の状況をよく示していた。

汽水産は、マガキ・フトヘナタリの2種、海産はタイラギ・ハマグリ・バカガイ・サザエ・アカニシ・ズガイ・ウミニナ・マクラガイ・ツメタガイ・ツノガイ・ムシロガイ・ウミナシトマヤ・イシダタミ・ツメガイ・オオヘビガイをそれぞれ微量に含んでいた。

貝塚層内には、動物骨としてシカ・イノシシ・イヌ・水鳥・カメ・フナ・コイ・ボラ・マダイ・サワラ・サメ・フグなどの骨の他、クロベンケイガニの鉗脚多数が出土している。



◆貝塚層の堆積状況
(第27次調査Cピット)

遺物出土状況▶



東方山麓に所在する日下貝塚で検出された縄文晩期の小貝塚の例では、セタシジミが97%に達し、クロダカワニナは僅少であるのに対し、鬼虎川遺跡の初期貝塚は微少なクロダカワニナの割合が非常に多いのが特徴である。

貝塚層より伴出した遺物は、突帯文系土器・弥生土器・石器・木製品・骨角牙製品・貝製品・土製品があるが、弥生土器以外は全体に縄文色の濃い遺物である。

第21次調査では、縄文時代晩期末に比定される長原式系の深鉢・浅鉢・壺などの突帯文系土器多数と共に、弥生時代前期中葉の壺・甕などの弥生土器が少量共伴する事実が確認されたが、続く27次調査地点では良好に遺存した貝塚層内から、同じく突帯文系土器と共に弥生前期中葉の壺・甕・鉢・蓋などの器種がそろって多数出土した。

推定面積約320m²に及ぶ貝塚全体の広さから考えると、当然投棄ブロックに時期差があり、地点により出土遺物の内容が異なることが考えられるが、27次調査では復原した土器個体数で概算すると、半数近くが弥生土器が占めている。貝塚内の弥生土器群は、上部を覆う前期後半期の層の土器群とは全く異なる古いタイプである。

弥生土器の壺には、黒色塗布物と赤彩文を施し、細い沈線で木葉状文やV字斜線文などを刻むものがあり、鉢や甕には九州の板付Ⅱ式土器や岡山県津島南遺跡などの弥生土器に類似するものがあり、胎土の観察・分析から見ても他地域から搬入されたと思われる土器群が多い。

また、突帯文系土器は、深鉢がいわゆる長原式とは異なった口頸部の傾きの外反度や、刻目突帯がより下がった位置に付くものが多く、壺でも刻目突帯を持つ古いタイプと、刻目を施さず口頸部を外反させた新しいタイプが存在する。

さらに、弥生土器の甕とは手法が大きく異なり、口縁部や頸部に断面三角形の無刻目の突帯を付けた小型の甕の一群や、砂粒を多く混ぜ、突帯を貼付けたような直口する口縁端面角に粗い刻目を施す粗製の甕などは、板付式系土器の影響のもとで成立し、長原式に後続する土器形式として考えると、貝塚出土の土器群は、大きく二段階に分離編年することができる。

貝塚より出土した木製品には、側面縦位に刻目を施した大型蛤刃石斧装着用の木製斧頭があるほか、長い柄をもつスコップ状木製品（鋤？）・穴掘棒？・短弓・刺突棒・短剣形木製品があり、農具的な道具が含まれているのが注目される。

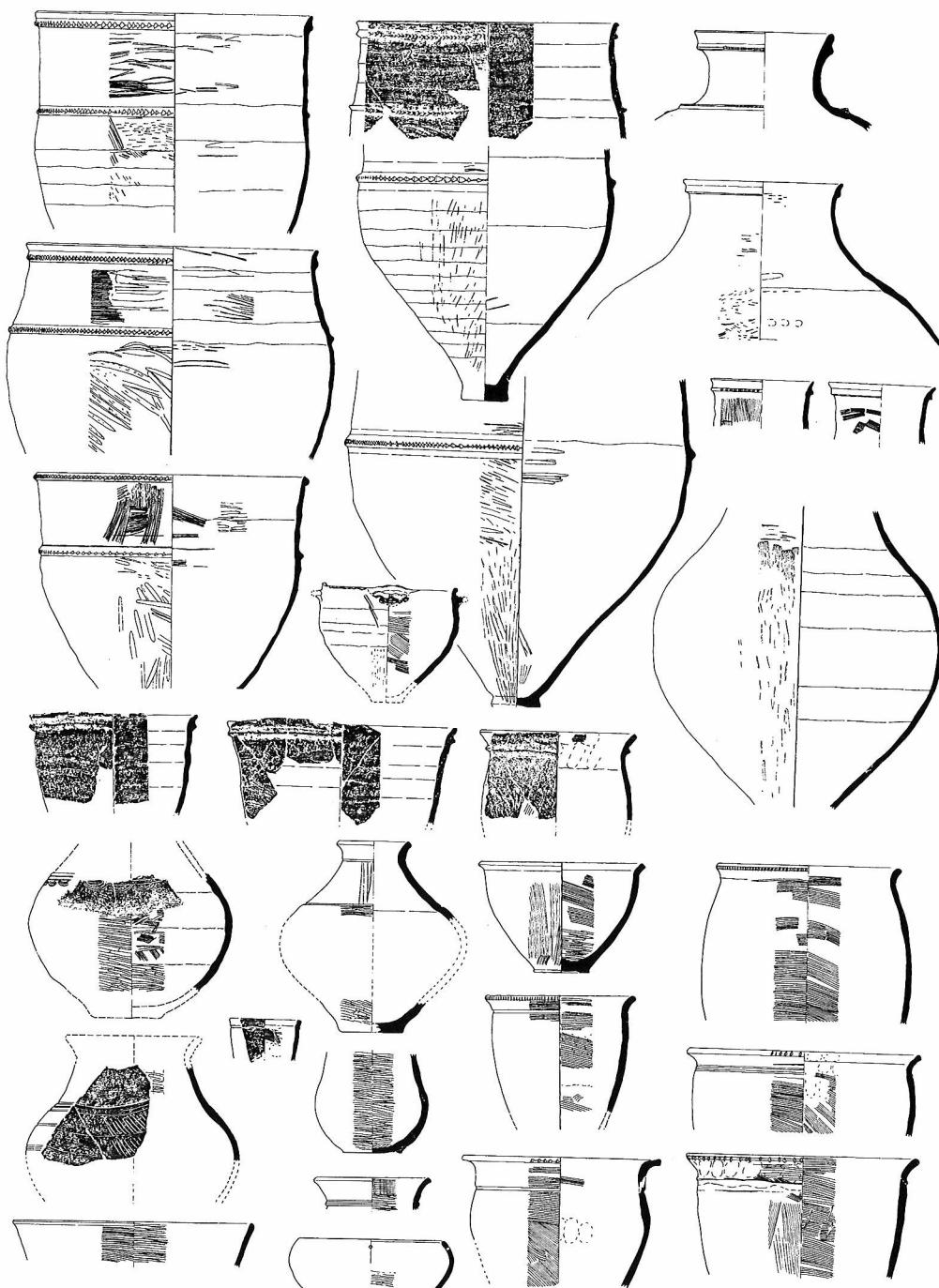
石器には、小型無茎式石鎌や石皿片のほか、網錘りである石錘が多く、弥生文化特有の石器は皆無である。石製品としては、唯一蛇紋岩製の玉がある。土製品には、耳飾りと考えられる環状土製品のほか土錘が含まれており、漁撈関係の遺物が目立つ。

また、骨角牙製品としては黒漆塗りの短剣形骨製品や、先端を尖らせ二孔を有する鹿骨製装飾品が数点あるほか、ハイガイやサルボウガイに小孔をあけたもの、小孔2をあけたマツカサガイ製の貝製装飾品が多く含まれているのも大きな特徴である。

鬼虎川集落の西端、凹地底内に残された弥生初期の貝塚の様相は、文化の過渡期に在地集団が新たに稻作文化受容の中で形成した廃棄場として理解するのか、あるいは新たな稻作集団と在地集団の接触交流の中で共用の廃棄場として形成されたものであるか、判断に苦しむところ

であるが、少なくとも貝塚全体におよぶ遺物の中の土器の構成から見れば、在地集団が新しい稲作文化を受容していく過程をそこに読み取れるのではないだろうか。

(原田)



▲貝塚より出土した突帯文土器・弥生土器(1/8)



▲貝塚出土の突帯文土器と弥生土器